



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第七卷

河出書房版

現代日本小說大系 第七卷

昭和二十五年四月二十五日 初版印刷
昭和二十五年四月三十日 初版發行

著者

徳木 富健次郎

發行者

河出 孝雄

編集者

青野 季吉

印刷者

井關 好彦

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出 書房

倉庫番號A二一〇一四番
電話神田(25)三一七四番

(大岡印刷株式會社)

目次

徳富蘆花

思出の記

六

木下尚江

火の柱

二九三

解説(青野季吉)

四〇一

徳富蘆花

思出の記

三十年前われを其膝に抱きて桃太郎かちから山の話をか
かしめ玉ひ三十年後の今日も銀鬚を撫してわれに世道人
心の重んず可きを誨へ玉ふ吾父君のことし八十の齡を重
ね玉ひし賀の御祝ひに此つたなき物語を献ず

"All things are engaged in writing their history. The planet, the pebble, goes attended by its shadow. The rolling rock leaves its scratches on the mountain; the river, its channel in the soil; the animal, its bones in the stratum; the fern and leaf, their modest epitaph in the coal. The falling drop makes its sculpture in the sand or the stone. Not a foot steps into the snow, or along the ground, but prints, in characters more or less lasting, a map of its march."

—EMERSON.

一の巻

(一)

古の君子は、よく十歳にして經國の志を起すの、三歳にして字を識るの、穎異人に絶するの、二葉より芳しのと云ふが、凡人の吾憐慙かしながら自傳の第一章を飾る可き事を有たない。この凡庸な頭に、「吾」と云ふものゝぼんやりと宿つたのは、左様、先十一の年。僕が若し政治家なら、其年は恰も大久保甲東が紀尾井坂に濃厚な血を濺いだ年として、大筆特書するのであるが、政治家で無いから、其要も無い。併し兎に角十一歳は僕にとつて記憶す可き年であつた。其年の春に父は一家を破産し、其年の秋に僕は父を喪つたのである。

僕の故郷は九州、九州の一寸眞中で、海遠い地万。幅一里長さ三里と云ふ「もつそう」の底見たやうな谷は、僕の搖籃です。何方向いても雄木山がぐるりと屏風を立て廻し、其上から春は碧くなり冬は白くなる遠山がちよい／＼顔を出して居る。尤も高いのは、東に一峯孤立した高鞍山で、誰が天邊に棄捨てたのか宛がら鞍を置いた様、雨が降る前には必ず此

岳に雲がかゝり、此岳が見へ出すと如何様に降つて居ても傾て晴れる、雪がかゝるのも日が射すのも先此山が第一で、云はゞ僕が故郷の氣象臺だ。四方の山から混々と湧出づる清水は、漚り集つて村人の所謂大川小川の二流となり、十分に谷を濺して居る。谷は一面の田——其田を無理に排けて、此處に村が一撮、彼處に家が二三、北の隅にあるのが妻籠の里と云つて先此谷の都で、町と云へば町、戸數は千に足らない。取出でゝ云ふ程でも無いが、今も忘れ難く思ふのは、水の清いのと、稻の美しさである。たしか東京に積出して鯉米になるそう。實に其稻葉の艶々と青むで、暢々と立揃つた所は、都人士に見せもしたい。實に見せたいですよ、蛙の聲を踏分けて一村總出の田植時、早乙女の白手拭がひらり／＼と風に靡いて、畦から畦に田植歌の流るゝ頃の賑合を。それから炎天の田草取は傍で見て辛い、併し夕立！ 暑い、堪らぬと云ふ下から股々鳴出す。突然大氣が冷る。ふつと見ると、黒雲が最早高鞍山を七分通り呑むで居る。其がインキの散る様にずうと満天に浸染むで来る。稻妻がきらり。夥しい雷鳴二つ三つ。冷たい風が颯と吹て来ると、頓て大粒の雨がぼつり。耳を掩へた太郎作が未だ半町と逃延びぬ中に、鳴る、光る、降る、吹く、——世の終かと思ふ程の荒れ様。と思へば忽ちずうと明るくなつて、駄むだ様だと出す顔へ露きわの白雨二條三條、笠押取つて出て見る頃は夕立は最早隣村へ逃

げのびて、隣村は宛がら簾越になつて居る。大空を眞二に割つて、東の方はまだ眞暗雷様がごろ／＼太鼓を敲いて居るが西の方は明々と夕日がさして、高鞍山の頂邊と思ふあたりから谷へかけてすばらしい虹が立つて居る。あゝ涼い、御覽なさい、先程までやゝ瘁むで見へた稻が唯つた一瞬の間に眼も醒むる程青々となつて、一二寸も伸びた様に、何處を見てもさわ／＼／＼／＼さどめいては露を揺りこぼして居ると、濁り泡だつ田の水はどく／＼溢れて、小鮒や鰯が矢鱈に畦路にはねて居る。虫送りの音も、初秋の風をよ／＼と稻葉に音づるゝ頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻花の美しさ。二百十日・二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷た谷間が、何時しか金色に照つて、此處にもさわ／＼、其處にもさわ／＼、收穫の盛になれば、誰を訪ねても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで靱ずりの音が聞へて、高鞍山に雪が見へる頃は、つい先月まで田にあつた稻は最早奇麗な米俵になつて、庫や納屋に積まれて、東家西隣新酒に舌鼓うつて豊年を祝ふのである。

其から水！ あゝ此様な水が縦横に市中を流れて居たら、東京も莫大の金をかけて罪人までこしらへずに済むだかも知れぬ。僕の故郷では殆ど井戸の用なしと云つて宜い位。四方の山から源泉混々として絶へず湧出づる清水は、縦横に小さな流をなして、鮎はしる二つの川に落ち合ふ。何處に行つても、

潺湲、涼々、酒々、混々の音が聞へる。非必絲與竹、山
水有清音、で、夏の月夜なぞ、ちつと聞て居ると、實に好い。京都は水が宜いと云ふが、僕は京都よりも宜と思ふ。蘇東坡の文では無いが、何處を掘つても清泉滾々として湧出づるのである。馬が飲む道側の小溝の水も、女が洗濯する家の前の細流も、乃至水車が撥ぜる田川の水も、實に氷と冷たく、玉と澄むで居るのである。今でも夏になると、僕は一入故郷を忍ぶのです。

水がよくて、米がよい。因で田舎のくせに酒家が多い。僕の家も造酒家で、加之妻寵第一の豪家であつた。

(二)

素生を云へば、南朝の忠臣の其また忠臣で、店には酒樽を並べても、奥には腰と刀劍を飾つてある。僕も六歳の頃は、木劍を帯いて、正月には紋付の羽織袴で、下男を連れて八幡宮へ参詣するが例であつた。端午には鯉幟と矢幡で門の前が眞暗になる位。自分でも吾菊池慎太郎は士族だと威張つて居た。

年月と云ふいたづら者が、覺へて居たいと思ふ事は容赦もなく忘れさせて、何でも無い事ばかり思ひ出させる。家の柱が無暗に大きくて部屋が薄暗かつた事や、破風の所に鳩の像を高彫にしてあつた事や、裏の方が馬鹿に廣くて倉庫が幾箇もあつた事や、其一の倉庫には何時も米俵が山程積んであつた

事や、馬鹿勘と云つて其處に二三日此處に四五日と町の豪家を食廻つて少し其家の米俵が減れば直ぐ他の家に移るのが癖であつたが僕の家ばかりは一ヶ月乃至二ヶ月逗留の榮を辱ふした事や、一の倉庫には仁王様の風呂桶の様なのが一杯入つて居て、其倉の屋根から恐ろしく大きな榎樹がぬつと頭を出して、夏の頃になると蟬の聲が宛がら雨の降る様であつた事や、其れから家には若い男女が二三十人も居て盆の月夜に裏庭で白手拭を冠つて躍つた事や、此様な事はきれ／＼に覺へて居るが、さあ家の全圖をひけと云はれると一切分からぬ。また、夏の夜松明ともさして男の肩にのつて小さな鐘をたゝいて田の虫追に行つたことや、父が朝寢僕も朝寢で——尤も小學校に行く様になつてからは餘儀なく早起きしたが——冬の朝九時過に起きて八疊の茶の間に出ると大きな鹽がきつてあつて若い男が半疊もある火斗に山の如く焚火を持つて來た事や、節分には大叔父が袴をはき澄まして煎豆をまいて「福は内鬼は外」と云つた事や、僕は毎晩此大叔父に抱かれて寢ては鎮西八郎の話だの山寺の和尚と小僧の話だの聞いた事や、其大叔父が時は酒臭くて話半にうと／＼睡りかけ、やつと揺り起してもまたむにや／＼、話が曖昧になつて、鎮西八郎が鶴を放して猿を退治して白縫姫を娶つたのか、猿が鶴を放して八郎を退治して白縫姫を貰つたのか一向分からないので僕が非常立腹した事や、此が僕を負つて何處に行つても「内の

坊様の御伶相と云つたら」と自慢して居た事や、此様な事はウロ覺へに覺へて居るが、其頃の生活を順序立てゝ話せと云はれたら、其は出來ぬ。先大抵田舎豪家の獨子の生活であつたと、其様云つて置かう。

併しながら世は何時までも春風和やかに花見て暮らすことは出來ぬ。此谷第一と云はれた僕の家の家もついに破産に際會することになつた。僕は委しい事は知らぬ、また云ひたくもない。併しながら父があまりやさしかつたのが、畢竟一家零落の原因となつたやうに思ふ。父は實に腹に一點の毒もない、人を疑ひ得ない、人に斯うと云はれて否と云ひ得ない人であつた。已に祖父の没後、堅吾叔父——僕に昔話をして呉れた大叔父では無い、僕が大嫌の叔父だ——別家さす時も、叔父が強情に慾ばつたので、身代を眞二つに割つて與へた上に、家までも建てゝ遣つた位であつた。親類他人の差別なく、金を借られて貸さなかつた例が無く、賣りつけられて買はなかつた例が無い。學校に金を出す、親類に泣きつかれて夥しい金額の借用證文に連印する、其がまた奇妙に爲る事は外れ、厄介はふりかゝり、其上に造つた酒が二年續けて腐るなど種々な事が高じて、さしもの大身代も何時か箭の皮剥く様に瘦せて來た。厭な癖ぢやら者が出入したり、其を母が嫌つて頻りに父を諫めたり、懇意にする和尚様が父に忠告したり、町の者の者が僕の家に入出入する毎に空洞になつた大木の下通る様

な顔をしたり、兎に角其様な事を見聞するにつれて、一種不穩の感は悪夢の如く幼稚な僕の頭を壓して居たが、果してカタストロフが遣つて來た。山を賣り、田を賣り、道具を賣り、酒造を止め、雇人を減し、果ては父が最後の賭として望を屬して居た製絲事業が見事失敗して、僕が十一の春家屋敷悉皆人手に渡し、父と母と僕は町はづれの一軒家——祖父が物數寄に建てた小さな隱宅に引移つた。

不幸は伴侶を好むで、父は其後鬱々として酒ばかり飲むで居たが、其年の秋母や僕に對して「濟まぬミミミ」を云ひ續けて、一片の墳墓となつてしまつた。

(三)

明治六年征韓論破裂以來、世の中兎角物騒になり、桃源の様な田舎にも社會がうたす波のうねりは自づから響いて、佐賀秋月小倉の亂、熊本神風黨の暴舉、其れよりも猶恐ろしい明治十年の亂、相ついで村人の肝を冷やしたが、併し豊かな家に父母と棲むで居る小兒の眼には、山の上から海の暴風を見る位のものであつた。誰某と云ふ前參議は謀反して死刑の際に「唯有皇天后土知」と云つた、某の縣令は腹を刺られた、肥後の田原と云ふ所では合戦が十八日もつゞいて拔刀隊が土壘を越へて切り込むなど、云ふ話は戸毎に傳はつて、一度は薩軍の一隊が今にも突進して來るやうに村中大騒ぎしたことも

あつたが、幽靈譚と同様僕には怖くて面白く、夜になると父と母の間に寢ながら色々な話を思ひ出して、颯々吹く嵐の音に心どきつかせながら、右に左に父母の手を握つて、斯様に阿爺と阿母の間に寢て居れば何が來ても大丈夫、可愛想にして居るだらう、此様な暖かい床も有らず、父も母も有つまい、あゝ安心、可愛想、可愛想、安心と思ひこみつい眠つてしまつた——其も今は一場の夢となつた。夜毎々々川の字に寢た其大事な一條が缺けて、僕は母と唯二人此宇宙に残されたのである。

僕は父を愛して、母を敬した。平生は父に懷かれて寢るのが好きであつたが、病氣の時は母の手を握つて居たかつた。花見には父に手を引かれて、盜賊の入つた夜は母の袂の下に隠れる。名は節と云つて、實に吾母ながら凛々しい、氣象の勝た人。父は五目も十目も母に置いて居た。一家分散後はますます母を憚つて、餘所目にも氣の毒な程氣をかねる。喧嘩も時々起つた。「陸じうして一塊の乾けるパンあるは、爭ありて宰れる畜の盈たる家に愈る」。勿論である。併しながら悲い夫、乾けるパンは多く争の原因になる。況んや昨日は榮華の滋味に飽いて今日粟飯の硬きを食ふ身となつては、斯る争の起るも無理はないと思ふ。大方は父の敗に歸した。「皆乃公が悪いから」と父は悄然としてしまふ。すると母が突然落涙する。

僕も泣く。斯様な悲劇が月に幾回となく繰り返へされるのであつた。あゝ併しながら其悲劇すら最早なくなつた。彼やさしげな眼も小供らしい笑ひ聲も、昔紋付の羽織袴で親類寄合の上席を占めて居た時の立派な風采も、零落して町外れの一軒家の柱に倚つて愁然として居た容すも、最早見られない。二親揃ふて育つる子は貧乏でも長者のくらし、と云ふが、何も知らぬ僕も父の棺を送つて歸つた夜は、母と顔見合はして、眞に「零落」の淋しさを感じるのであつた。

辛い、と云つて零落程辛いものがあらふか。上る一步は荊棘を踏んで汗だらけにならふとも、望と云ふものが、上にあつて引揚げる。併し昨日迄の榮華の夢を脊に負ふて、眞黒い明日の虞を懷に抱いて、ほと／＼零落の阪を下つて行く一步一步は實に血涙である。其も東京とか、乃至大阪とか、人間が桶の中の芋の様に／＼して居る所では、贅澤も仕放題、贅乏も仕放題、随分昨日の長者今日は顔を拭つて裏店にマツチ箱を張ることも出来ないではないが、田舎では實に溜らない。先臍首の様なものゝ生きて感ずる丈が更にひどい。惣知らぬ顔が無い丈、何處を見ても苛責の鬼に圍まれる。昔の榮華の歴史を語んじて居られる丈、皆の結んだ口もとに嘲弄冷笑の意がほのめいて居る様に思はれる。一寸歩いて、昔吾有であつた家屋敷山林田畑が到る所に待伏して、吾を辱しめる。昨日まで下つて居た村の頭は最早下らなくなる。昨日ま

では、隣の家の梅の花を折つても、「坊ちやま、御危ふ御座います、私が折つて上げませう」と云はれたのが、今日は「何處の餓鬼だ、人の麥畑歩いてるなあ？」と怒鳴られる。蕩擻いでも、足掻いても、最早駄目だ。田舎は深い井戸の様なもの、一度陥ちたら容易に上れない。

僕は今母と其井戸に陥ちてしまつた。實を云つたら名代の舊家、自費では無いが祖先代々随分隱徳を積むのであるから、せめて縄つて上る桔梗でも下ろして呉れる者が無い筈はないのであるが、其様な者もなく、見殺にせられるのは、一の子細があつたからで、其は即ち叔父の迫害である。

叔父は即ち亡父の弟、姓は矢張菊池を名乗つて、堅吾と云つた。僕は如何しても此叔父を好き得なかつた。父の寛大なるも、常に彼を恩不知と怒つた。母の如きは人非人だと常に云つて居た。叔父は已に父と身代を折半したを以て足れりとせず、猶家を建てさせ、それでも猶不満の様子であつた。無邪氣な僕も叔父を見ると何だかス様冷やつこい日蔭にでも入つた様で心地が悪かつた。彼は醬油製造を業として頗る繁昌し、炭焼業を始めて、此にも成功し、播けば殖へ、出せば倍し、貸せば太る、と云ふ風に、資材を治むるの道に於て、健かに兄よりも兄であつた。然るに彼は父——實兄の破産を現在眼の前に見ながら、一錢を出して救はうともせず、剩へ其家屋敷道具を他人の名で買取つて、終には其處に住み込むだ。云は

ば叔父は菊池家の全身代を横領したのである。其と知つた時ばかりは、流石の父も憤然として最早弟とは思はぬ兄とは思ふなど云ひ送つたが、金銭の上に兄弟はない。先方は素より零落した兄には何の情義も無かつたのである。父が死むだ時も唯義理に一寸顔を見せたばかり、母は怒つて葬式の日取も云はなかつた位である。何故斯通り叔父が迫害を加へたか。僕は今に到る迄其故を知らぬ。知らぬが、僕の祖父は常に父を愛して叔父を疎んじて居たそうだ。僕の母は此頃まだ三十にならず、此谷第一の美人で、而して母が常に叔父を嫌つて、顔さへ見るとふいと立つてしまつたことはよく覚えて居る。無情の叔父は、僕が一家の零落を冷眼に看過した上に、云はば兄の一家を追ひ出して其跡を占領した上に、父が死んだ後までも、猶迫害を已めぬのである。僕の親類——町の大家の大半は親類縁者であつた——の中には、非常に潔癖家で毎日掃除ばかりして居る菊池金藏と云ふ老爺もあつた。非常に猫好きで、白、黒、三毛、斑とりまぜ十疋も飼つて、猫が鼠を捉ると「其様な物を食ふ人（！）があるかい、さ、さ、此をお食ふなさい」と云つて、わざ／＼鮎の肴附を盛つてやる老婆もあつた。發句の上手な人もあつた。非常に柿剥き自慢の先生もあつた。其智慧だけは別にある將墓の名人もあつた。併しながら唯一人も彼堅吾叔父の向ふに立つ程の者が無く、叔父は親類頭として殆んど専制君主の勢力を振つて、僕の一家

をボイコットしたのである。村の者町の者の中には、藪では随分氣の毒に思つた者もあらふ。併し此の谷第一の金満家、一番の智慧者、一番の意地者たる叔父の不機嫌を冒しても、僕等に同情を表する程の勇者もなく（思へば吾儕の善は如何に弱いものであらふ！）長いものには捲れよ、弱い者は窮めよ、でつい有意無意の迫害を加へたのである。僕は決して怨みには思はぬ、人情は得て其様なものだ。弱きを扶け強きを挫くなんぞは慾を知らぬ昔の馬鹿者がした事、弱肉強食是天理の今の世の中では、上帝を拜むより金を拜むが餘程近道、未來はあるか知らぬが未だ未だ遠いこと、向ふの長者の御機嫌を損ねては差寄り此可愛いゝ口が乾あがるではないか。だから世は富めるについて大なる者愈々大に、乏しきを削つて瘠たる者ますます瘠せたりで、古の聖人も云はれた通り「有てる者は與へられて猶餘りあり、有たぬ者は其有るものを奪らるゝ」のである。早い話が、外套に狸虎の襟つけてフラツシ天の膝掛を携へた若い紳士が乗る一二等の客車には厚いクッションを敷き湯たんぽを備へて、よぼ／＼した百姓老爺は三等の板の腰掛に水涕を吸つて居るではないか。——いや此は話が餘所へ飛むだ。兎に角先斯様な次第で、母と僕は親類知己の眞中に居ながら全く孤立の身となつてしまつた。

前にも言つた通り、母は非常に氣象の烈しい人で、家は潰れる、良人は死ぬる、大抵の婦人は落膽沮喪して死ぬるのだが、母はいよ／＼運命に反撥して、おのれと云ふ一念が絶へず眉目の間に閃めいて居た。奢つてこそ居なかつたものゝ、大家に生れて大家に嫁した身の、緑の黒髪惜げもなくふつゝり切て、木綿着物に呉細の前垂、木綿をひいたり、襪を織つたり、夜も晩くまで婢を相手に裁縫物をしたり、精一ぱいに働いて居た。僕は前に村中町中残らず僕等を迫害した様に云つたが、二三の除外をしなければならぬ。此婢の如き、實に縁綰草を受く可きものであらふ。名を重と云つて、顔一面の黒痘痕、丈は五尺五六寸、力は男二人に敵する、板額の亞流であつた。母が嫁して來ぬ前から勤めて、最早二十年、一度も病氣したことなく、怒つたことなく、失策をしたこともない。一家破産の時、大勢の僕婢はそれ／＼暇を出したが此お重のみは斷じて動かない。父が、其心は嬉しいが今迄の様に給金がやれぬからと云つたらお重刀自生れて初めて怒つた、且那樣あ此重を畜生と思つておいでなさるか、云ふんで、殆んど腕力で踏み止まつた。以來彼は殆んど家族の一人となつて、父が死んでからは、いよ／＼骨身を惜まず、根限り働きて、百姓もすれば米も春く、お蠟もする、お針もする、實に母の片腕であつた。彼は僕の誕生の時から知つて居るので、十一になつても猶手打々々あわゝの孩兒の様に思つて、老牛

の轡を屈る如くに僕を愛した。彼女が所嫌はず、相手を問はず、僕の自慢をするのは些片腹痛かつたが、併し僕はお重が大好きであつた。

お重の父も大好きであつた。彼は名を勝助と云つて、祖父が惣庄屋と云ふ役をして居た時分に、配下の庄屋であつた。三世に歴史して、云はゞ我家の武内宿禰である。尤も宿禰の様に白髭を蓄へては居らぬが、てら／＼と禿げた額の頂邊から皺の寄つた額の邊まで、一面緒光りに光つて、眼と口元に云ふに云はれぬ愛嬌をもつて、始終笑を含むでにこ／＼して居る所は、宛然チヨン留の恵比須様だ。彼は先づのつそり入つて來て、爐側に坐つて、ゆつたり「慣ちやま」と僕に云つて、ゆる／＼古びた革の煙草入を出して、二三服吸つて、吹殻を吾掌の上にたいいて、また新に一服つけて、それから悠々と掌の上に燃て居る吹殻を棄てゝ（僕は珍らしい掌だと思つた、何時か眞似てやつて見た所が、眞黒に掌を焦したつけ）偕談話に入るのである。彼は蕪漬が好物で、僕は常に斯様な地口を云つて居た「カブツケや、カッスケ食べないか」世には不思議な事もあるもので、立派な水引かけた土産をもつて上手に挨拶をして慰めても一向有り難くもないが、扱いで來た大根一把と土間に置いて、上つたきり何も言はず唯坐つて居て、其れで此方の氣苦勞もめつきり輕くなることがある。實に沈黙は金、雄辯は銀、勝助は通用する金は有たなか

つたが、此の金は確かに持つて居た。併し彼は決して沈黙してのみ居なかつた。或時彼が斯様母に言ふのを聞いたことがある。「奥様、天道様あ光つて御坐らつしやいます。人間が羽振りの宜い時にや、彼雪ころがしの如（前日雪が降つたので、僕がお重を相手に雪丸を拵へて置いた、其を勝助爺は指したのだ）轉んで行く程我重量で土でも藁でもくつつけて太つて行くでございませうが、追付お天道様が照りつけらつしやると、段々融けて、土も流れる、襦袢も出る、つまりは元の無に還りますでな、はい。奥様、今に御覽なさいまし、彼新屋敷（叔父の事）も此雪丸同然になりますから。御辛抱が大事でございませう。何の事だかよくは分からなかつたけども、斯一言はしつかり小耳にとまつて居る。

三里程山奥に住むで、月に幾回、炭馬を引いて出て来る、十二三の新玉と云ふ男、此も僕は大好き、彼も僕が大好きであつた。彼は面白い男、體格も大きく、聲も太いが、其割に眼が細く、それで鼻が無性に大きいので、一寸見ると顔中鼻ばかりかと思はれる。博奕もうたず、酒もあまり飲まず、寺の和尚に書いて貰つた手本を夜の暇々に習つて、山道の往來に論語を懷中して、馬の口綱をとりながら子曰學而時習之と誦する男である。彼は山から出て来る毎に、炭俵の上に或は一問程の自然語、或は從にぬいた生柑茸、或は蕨、或は楊梅などを載せて、毎も土産にした。而して僕の顔見る毎に、

『坊ちゃん、エライ人に御なんなさい、御なんなさい、なかに人が如何したつて構ふもんか、エライ人になつて皆を御辭儀させて御遣んなさい』と斯様云つた。

まだ一人僕が好きながあつた。誰と思ひなさる？ 大嫌いな叔父の娘、僕の従妹だ。其も姉の方は大嫌い、好きなのは妹の方であつた。姉は僕に一歳まさり、お藤と云つて容色好だが、小娘のくせにしやなら／＼として、いやに白粉をつけたり鏡と睨めツくらをしたり着物の小言ばかり云つて、昔から大嫌ひだつた。妹は僕に一歳下で、色は浅黒いが、眼鼻立のきり／＼とした、氣の利いた兒で、まだ僕が先の家に居た頃は、始終遊びに來て、「坊ちゃん」「芳ちゃん」と云つて、大の仲好だつた。今の家に越してから、一度隠れて遊びに來たが、あとでひどく叔父に打れたとか、何とか、其後はふつつり會はなくなつた。小學校の往復に顔見合はせると、涙ぐむで、恥かしそうな悲しそうな顔をするのをしば／＼見た。母は新屋敷と云ふと虫より嫌ひだつたが、（坊ちゃん）の母は悪い人ぢやないが、と母は云つて居た。此女兒ばかりは氣に入りて、可愛想に、彼兒も行々は苦勞をするだらうと、暗涙を含むだこともあつた。

何處の砂漠にも多少の綠地はあるもので、他郷の様な故郷にあつて寂しい僕等を慰むるものは、實に此數人であつたのである。

(五)

小學校には相變はらず通つて居た。僕の家から六七町田の中にちよこりと一個立つた茅葺のが其れで、田舎の事だから先寺小屋に些毛のはえた位のもの。文庫硯に、其でも流石石鏝丈はあつて、夏の盛は朝手習と云つて暗い内に蠟燭をつけて手習をする、冬は各自に火鉢を持つて行く、と云ふ有様。都遠い片田舎、殊に摺鉢の底の様な所で、何方へ出るにも坂ばかり、文明開化も此處へ来るには、草鞋がけで汗だらけにならふと云ふので、貧乏人が呼ぶ醫者では無いが中々一寸來て呉れぬ。東京の新聞紙と申すものが天にも地にも唯つた一枚來るばかり、其を町での識者と云はるゝ三四十人が戸毎に讀み廻はすので、最後の讀者が日本の出來事を知る頃は、最早其事のあつた以來地球が五六十遍も寢返へりうつて、氣の早い佛蘭西などでは革命の五六遍もして内閣が十遍も變つて居らふと云ふ位。だから、社會の風潮を感じる神經は極めて鈍なものであるが、併し明治も未だ十歳にならぬ其頃の改革又改革經驗又經驗片時も固定した精神のなかつたことは、今思ふても分かる。最初は學校も上下各々十級に分れて居たのが、後には六級になり、最後には上中下級に分れ、同じ試験を何度もして、同じ様な卒業證書を何枚も貰つたことを覺へて居る。單篇語地理初歩から讀み初めて、讀本も年に二三度は變

るので或貧乏人は到底本が買へぬと云ふて退學したことがある。僕は算術と習字が大嫌ひで、歴史と作文と地理と惡戯が大好きだつた。算術の勝負や清書の點取ではやゝもすると敗北するが、其でも級の第一を占めて居た。今から思ふと教員先生（實に好人物で、近眼で、煙草好きで、僕を非常に可愛がつて、而して誤謬ばかり教ふる先生だつた。其金科玉條は寬の一字で、名は増見先生と云つたようだ）少し手加減をしたかも知れぬ、尤も少しは出來たかも知れぬ、東京から全國巡回して來た今の視學官言は何と云つたか其先生（僕等が如何様にエライ人と思つたらふ！ 増見先生如何様に震へたろう！）から譽められたことも覺へて居る。兎に角第一には案封家の子、第二には先才童と云ふので、學校では威張つたものであつた。

所で一家破産する。父が死ぬ。其等の結果は直ちに學校に於ける僕の位置にあらはれた。今迄「愼さま」とか「坊ちゃん」とか云つた裏の太王作の小猿子までが「愼公」とか菊池とか呼乗にする。金満家の子供は急に身の丈が高くなつたかのように僕を眼下に見て、遊仲間にも入れて呉れぬ。

「愼ちゃんは何故彼様な小さな家に越したの？」と未だ無邪氣な幼童が言ふすら已に、脇にしむのに、無情な連中は何かにつけて僕を揶揄し、侮蔑し嘲弄して其れで自身がエラくなつた様に思つて居る。大將好きの僕、大將であつた僕、如何